

法政大学大学院  
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻 博士後期課程《一般》	2026年度 春季
専門科目		

【I】

《解答又は解答例》

受験者の知識、理解、考察、議論構築を総合的に問う論述問題であるため、一義的な解答例を示すことはできない。解答に当たっては、科学、宗教、そして哲学に対する可能な限り正確な知見と公平な評価をする判定能力、特に科学、宗教、哲学の守備範囲の特徴と相違、そしてそれらが交錯する部分（と、もしあるとすれば共通点）を見定め考察する思考力が求められる。

《出題の意図》

過去の歴史においても現代においても、人間の知的営みや実生活において科学、宗教そして哲学は大きな意味を有している（今回、芸術は割愛した）。それらの存在意義を正確に論じることがたやすいことではない。しかし、哲学を博士課程で研究する者は（も）それらの関係（無関係）についてある程度の見通しを有している必要がある。受験者はこの問題についてどのような考えをまとめることができるか、どの程度の知見を有しているか、という観点からの出題である。

【II】

《解答又は解答例》

1. 不動の動者 to kinoun akineton

「すべて動くものは動かされて動く」と考えたアリストテレスは、その動の始原たる第一原因を不動の動者（自らは動かさずして他者をうごかすもの）とした。それ自体は非物体的な存在であり純粋形相としての実体である。これは実質的に神を意味する。この神の生は自身を思惟の対象とする観想的な生活であり、人間の生は可能な限りこの生を真似ることによって幸福な生となる。

2. 存在の分有

中世の神学者トマス・アクィナスは、プラトン主義的な「分有」概念を神と被造物との関係に導入し、「創造」とは「存在を分有」することであるとした。分有とは、字のごとく「分け持つ」ということであり、より分かりやすく言いかえるならば「与えてもらう」ないし「原因される」ということになる。つまり、我々被造物は総じて、自らが存在することに関しては、自分とは別の原因を常に必要とする存在者であり、「何かによって原因された」存在者である。その存在を、普遍的な仕方原因するものとして、第一原因たる神があり、我々は神から存在を分有されていると言える。このように、無限な存在者としての神と、有限な存在者としての被造物に、存在の因果性という観点から関係性を見出す際に用いられる概念が「存在の分有」である。

3. 予定調和 l'harmonie préétablie

法政大学大学院  
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻	2026年度
専門科目	博士後期課程《一般》	春季

ライプニッツ哲学の中心的概念の一つ。調和とは釣り合いのない比例であり、諸事物間に見出される適合ないし一致の法則である。神こそがその調和の原則の起源であり、神が最善と最美を選択することによって調和が予め定められていることから予定調和と呼ばれ、その第一のものは諸実体間において認められる。実体はそれ自体で独立・完足（充足）した存在であり、その意味で外部から作用を受けることはないが、各々が何らかの点で創造者である神を表し、同時に神の作品全体である世界を何らかの点で表すことにより、各実体は神と世界を通じて適合しあい、全体で一つの調和した宇宙を成す。「私」における精神と身体の一合は、そのような宇宙的調和における個別の調和の一つである。また、幾何学的法則に基づく自然と目的論的（理由による）法則による道徳（実践）との間にも予定調和が働いている。

4. 「人」の同一性 **personal identity**

一般に「同一性」とは、「何らかの対象が異なる時点や一定期間を通じて「同じもの」である」ということである。問題となる対象のタイプに従って、この同一性の条件や基準は異なる。普通、原子などの部分を持たない単純な物理的対象の同一性は、その時間空間的連続性に基づき、生物等のより複雑な対象の同一性はその組織化の原理（たとえば遺伝子）の同一性に基づくと考えるのが一般的である。これに対して、一人称的・主観的意識（私・自己）の同一性は、単なる物理的連続性や組織化の原理では定まらないように思われるから「その原理が何であるか」が問題となる。ロックは「人の同一性」を「魂」や「もの」のような実体ではなく、「記憶」の連続性に基づくと考えた。ロックの考え方によれば、「人（私）」は異なる基体を実現していたとしても、記憶が連続的であれば同一な「人」である。一方ヒュームは、「自己」の实在性を疑うとともに、「人の同一性」を想像力が観念の上を滑らに移行することに基づく「錯覚」に過ぎないと考えた。現代では、パーフィットなどが「人の同一性」概念の重要性を批判し、そのことから帰結する倫理的問題を検討している。

5. 神の現存在の証明 **Beweis vom Dasein Gottes**

神の現存在の証明にかんしては、カントが従来 of 代表的な三つの思弁的証明を退けたことが、哲学史上有名である。第一に神の現存在の存在論的証明は、完全である神はあらゆる实在性を備えており、そのなかに現存在も含まれるから、神は現存在すると論ずる。これについてカントは、「存在 (Sein)」は实在的な述語ではなくて、ものの「定立 (Position)」であるから、神の存在証明になっていないとする。第二に神の現存在の宇宙論的証明は、この世界の偶然的な存在者の存在根拠を求めると、最後に最終根拠としての神が導出されると論ずる。第三に神の自然神学的証明は、自然界の秩序の最終根拠として神が現存在すると論ずる。これら第二、第三の証明は、カントによれば結局第一の存在論的証明を必要とするので、証明が成立しないとされる。これに対して、カントは独自の「倫理神学的証明」によって、神の存在証明を行った。

法政大学大学院  
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻 博士後期課程《一般》	2026年度 春季
専門科目		

6. 気遣い Sorge

ハイデガーの『存在と時間』における現存在の分析において、現存在のあり方を包括的に特徴づけるために提出された概念。現存在は、①自分に先立つ可能性というかたちで存在しつつ、②すでに一定の世界の内に投げ込まれつつ、③その世界において出会うさまざまな存在者とのかかわり合いに没入するという仕方で存在している。現存在のあり方を形作るこれらの3つの契機の連関が気遣いと呼ばれる。この気遣いというあり方を可能にしているのが時間性だとされ、この時間性が存在一般の了解を可能にしているというのが『存在と時間』の暫定的な結論である。

7. コミュニケーション的行為 kommunikatives Handeln

ハーバーマスが『コミュニケーション的行為の理論』等において展開した、他者との間で妥当要求を相互に求めながらなされる行為を意味する概念。他者を目的のための手段と見なす戦略的行為とは異なり、コミュニケーション的行為は、他者を目的と見なし相互了解を志向する行為である。その際には、究極の根拠付けによる真理ではなく、間主観的な合理性を担保する「討議」を通じた合意としての真理が求められる。この概念の形成の背景には、ドイツ語圏と英米圏の思想的伝統を引き継ぎながら、生活世界における当事者の視点を確保しつつも同時に普遍性を志向するようなハーバーマスの理論的立場がある。

8. 積極的自由と消極的自由 positive liberty and negative liberty

積極的自由と消極的自由は、政治哲学者アイザイア・バーリンが提唱した自由の2つの概念である。消極的自由とは、個人の行動が国家や他者から干渉されたり制約されたりしないことを指す。これに対して、積極的自由とは、人が自らの意志に基づいて自らが重きを置く価値や目標の実現に向けて自律的に行動すること、自己決定の能力を発揮している状態を指す。そのためには、各人が、自分が従うべき統治の内容を選択できる必要があり、政治的・社会的な決定プロセスに参加できることが重要になる。バーリンは、これら2つの自由概念が、西欧の政治思想や法思想に伝統的に深く根付いていることを示すと共に、積極的自由が個人の抑圧につながりうることを指摘し、その歯止めとしての役割を消極的自由に見出している。

9. 外延性公理 axiom of extensionality

外延性公理とは、与えられた集合 A と B に対して、それらの外延が等しいとき、すなわち、A の元はいずれも B の元であり、かつ B の元はいずれも A の元であるとき、A と B は等しい、とする公理のこと。集合はそれに属する元たちにより定められることを意味する。

《出題の意図》

哲学の重要事項に関する基本的な理解が受験者にどの程度あるか、基礎的な用語・概念の説明力

法政大学大学院  
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻 博士後期課程《一般》	2026年度 春季
専門科目		

---

がどの程度あるかを問うものである。